広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	上原輝男語録 ： 音声資料について
Author(s)	葛西，琢也
Citation	国語教育思想研究 , 29 : 3 - 3
Issue Date	2023-03-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00053953
Right	
Relation	

上原輝男語録　―音声資料について―

元聖徳学園小学校教諭　葛西琢也

このたびの特集は、すべて上原輝男先生の発言の録音資料に依っています。児童の言語生態研究会の例会、合宿、授業研究、および玉川大学での講義などが主なものですが、これまでの経緯をかんたんに説明したいと思います。

雑誌「児童の言語生態研究」創刊号は1968年5月5日の発行となっています。同年8月16日から2泊3日、伊豆の小浦で最初の合宿がありました。参加者24名。雑誌2号に、研究活動の内容と目的として小さな報告が載っています。○教科書教材（光村図書出版・1～6年）を対象に、予期される児童の言語生態要因の分析と抽出を行った。○言語生態要因の学年相当段階、ならびに言語生態要因の相互関係を求めた。となっていて、先生のお考えが明瞭です。

1973年の第6回合宿から地方の会員の勤務校で公開授業研究も行うことになり、3泊4日の日程となりました。以後、全国各地を巡るようになりました。そして、1980年ごろから、合宿の全日程を録音するようになり、合宿参加者が手分けして文字に起こし、全国の会員の手元に届けてきました。

例会は基本的に毎月一回おこなってきました。これは先生没後も現在まで続いています。コロナ禍の現在、東は青森や宮城、西は広島や北九州を結んでのリモート会議など考えられなかったことです。

月例会での先生の発言は、出席した会員の自由意思で録音し各自で保管してきたということもあり、残念ながらすべての発言を録音・保管できているわけではありません。

今日のように高性能のICレコーダーなどない時代ですから、テープレコーダーでは聞き取りが難しい個所もあります。遡れば、ガリ版刷りのものもあり、ほとんどが手書きの文書ですので、用紙の劣化の進行という問題とともに、カセットテープの劣化も心配です。資料としてさらに広く公開し活用してもらうには現状のままでは難しいこともあり、資料整理を担ってきた会員有志がデジタルデーター化にも取り組んできました。未着手で録音状態のままのもの、手書きであれワープロ作成であれ、すでに文字起こしされた資料のデジタルデーター化が急務です。大学の講義、各地で行った講演、メディアでの発言なども含め膨大な量になります。5～6人の少人数の場での座談というべき先生の語りを含め、録音そのものを聞いていただければいいのですが、書籍化された論文とは別に、その時その時の先生の情念に触れることのできる貴重な資料がこれだけよく残ったものだとあらためて思います。

この特集に先生が玉川大学文学部教育学科で担当していた四つの講義の精髄部が掲載されています。昭和59年度、下書きの段階である原稿をもとに「心意伝承の研究　芸能編」（昭和62年1月刊）を取り上げた「日本教育史特殊講義」が録音という形で残ったのです。当時、先生の担当科目をすべて録音しようと発心した学生がいたこと、僥倖というべきでしょう。このほかの「国語教材研究」「児童言語の研究」「国文学」、合わせて四つの講義はすべてデジタルデーター化（文書化も）が完了しています。

おことわり

文字起こしは、その場の参加者全員の発言をそのまま記録することを原則としています。その発言に現在の倫理観、人権感覚からすると不適切なものもそのまま記録されていますが、現代社会の倫理、人権を軽視するものではありません。

なお、今回、紙幅との関係で、発言の省略等の処置を取らざるをえませんでした。また、小見出しを付すことも含め、それぞれの担当者の判断で行っております。

なお、聞きとれなかった箇所は、「○○」などと表記し、個人名は原則イニシャルやアルファベットなどで表記しました。